福島県民俗学会 News Letter

ふぉーらむ・F 15

Aug. 2022
福島県民俗学会

http://fukushimafolklore.jimdo.com/
fukushima_folklore1971@yahoo.co.jp

令和４年度総会報告

日時：令和４年６月５日（日）13:00 ～ 16:00
場所：福島県立博物館講堂

令和４年度福島県民俗学会大会は、福島県立博物館の講堂を会場にして総会およびフォーラム「福島県民俗学会と福島県の民俗研究 50 年」が開催された。コロナ禍が続く状況のため、令和２年度と３年度は中止としたが、今年度は外部からの講師を招いた講演会を取り止めにすることで開催するに至った。総会では以下の内容が報告、承認された。

■会員異動について

令和３年度中に３名の新入会、２名の退会があったことが報告された。令和４年６月１日現在の会員数は 77 名。

■決算・事業報告ならびに予算・事業計画

事務局より令和３年度の決算と事業報告を行い、会計監査より適正な支出であったことが報告されて満場一致で承認された。また合わせて令和４年度の予算案ならびに事業計画についても満場一致で承認された。今年度の事業計画は以下の通り。

令和４年度事業計画

年月日	事業名	場所
R4.4.29	第１回幹事会	郡山市労働福祉会館
R4.6.5	令和４年度大会（総会・フォーラム）	福島県立博物館
R4.8	『ふぉーらむ・F』15 号の発行	
R4.10	地域持ち回り研究会	中通り
R4.10	第２回幹事会	
R4.11	『ふぉーらむ・F』16 号の発行	
R4.11.5	第 38 回東北地方民俗学合同研究会（伝統的農法の民俗）	山形市市民活動支援センター
R5.1	『ふぉーらむ・F』17 号の発行	
R5.3.31	『福島の民俗』第 51 号の刊行	

※東北地方民俗学合同研究会のテーマと場所は山形県民俗研究協議会より大会終了後に連絡があった内容。

■学会創立 50 周年記念事業について

１．記念書籍の刊行　引き続き『民俗で読み解くふくしまの暮らし』（仮題）を刊行する予定で調整を進める。対面とオンラインを併用して編集会議を進めており、来年度も継続する。

２．記念シンポジウムの開催　今年度も開催に向けて調整を行うが、新型コロナウィルスの感染終息が見えないため事業計画には挙げていない。今後の開催については、記念書籍の刊行に合わせて柔軟に対応していく。

（事務局　内山大介）

令和４年度大会 フォーラム報告

令和４年度福島県民俗学会大会
フォーラム「福島県民俗学会と福島県の民俗研究 50 年」
令和４年６月５日（日）14:00 ～ 16:00

（１）岩崎真幸氏「「会務報告」からみた福島県民俗学会の 50 年―これからの地域学会を見すえて―」

岩崎氏からは、当会が毎年発行している会誌『福島の民俗』内の「会務報告」から当会の活動経緯を辿り、それを踏まえて今後の活動についての課題提起があった。

当会は昭和 46 年、岩崎敏夫が会長、山口弥一郎が顧問となり発足した。発足の背景には、高度経済成長期の影響による生活様式の変化で、「民俗資料」の収集や記録をすることに関心が寄せられたことがあるという。会の発足後は、「地域」を念頭に置いた研究が行われるようになり、それによって多彩な人材が輩出された。また、自治体史をはじめとした民俗誌の編纂が活発に行われるようになった。

岩崎氏は今後の活動について、①「民俗学」に対する生活者の関心の希薄化、②蓄積されたデータをどのように活用するか、③民俗学の原点である「自己内省」をすることを課題として提示した。また、「会は面白くなくてはならない」、「生のもの（ありのままの研究成果）を出して評価してもらう」ことの重要性も併せて強調した。筆者はまだ民俗学の研究歴が浅いが、今後自らの研究成

果を積極的に発信して会員の皆様にご指導いただき、より研究内容を深めていきたいと考えている。

（2）丹野香須美氏「「磐城民俗研究会」が育み、そして残したもの」

丹野氏からは、氏自らも所属していた磐城民俗研究会の活動の歩みについて発表があった。

磐城民俗研究会の前身となる磐城民俗研究同志会は、昭和 10 年に高木誠一・山口弥一郎・岩崎敏夫・竹島国基を中心に発足し、昭和 13 年には磐城民俗研究会に改称し活動していたが、昭和 20 年代に事実上の活動休止となった。その後昭和 39 年に、岩崎敏夫・和田文夫が顧問、大迫徳行が事務局となり、磐城民俗研究会の名を継いで活動を始めた。当初は活発な活動がなされていたが、徐々に計画倒れする企画が目立つようになり、それと同時に対面での活動回数が減少していったという。大迫氏の逝去や震災の影響等もあり、平成 23 年に活動休止となった。

以上のような経緯から、丹野氏は、①会員同士が直接顔を合わせてコミュニケーションを取ることの重要性、②会の規模に応じた計画性、③会としての方向性（研究成果をどのように地域に還元するか）を見出すことの重要性を指摘した。

①については筆者自身も、昨今の新型コロナウイルス感染拡大の影響で当会が 3 年ぶりの大会開催となったことから、会員同士が対面して意見交換することの意義を再確認した次第である。

（3）内山大介氏「会津における昭和戦後の民俗研究―山口弥一郎とその周辺―」

内山氏からは、戦後山口弥一郎が中心となって行われた会津地方の民俗調査について発表があった。

山口弥一郎は、戦前岩手北上の農村で生活者の視点に立った「寄寓採録」を行っていたが、戦後故郷の会津に戻って「帰郷採録」を行った。特に、会津女子高校郷土研究部の顧問を務めていた頃は、学生とともに「僻地」でフィールドワークを行った。その後、山口は会津民俗研究会の発足やダムによって水没した集落の調査などを通して後継者を育成し、それに影響を受けた地域の若者たちは後に自治体史編纂や文化財調査などを担うようになった。

以上の山口の研究活動の中で一貫しているのは、断絶・衰退・変容を余儀なくされている地域社会を明らかにすることであった。これは、高度経済成長期における劇的な生活の変化の裏で失われゆく民俗の記録・保護という文化財的視点と、ある意味親和性を持ち公的調査につな

岩崎真幸氏の発表のようす

がっていったと内山氏は結論付けた。一方、内山氏は変化を伴う動態的な対象として地域社会をとらえるフィールドワークは、当時先鋭的な取り組みであったとも指摘した。

今日においても、東日本大震災や新型コロナウイルスなどの影響で、各地の民俗は大きく変化を遂げつつある。筆者もこうした変化に関心を持ち続けていきたい。

（会員　齋藤りぼん）

福島県内 文化財の動き　福島の猫に関わる神社と祠

福島県内には、猫を祀った神社や祠は、現存しないものを含めると下記のように 6 ヶ所ある。

1. **猫稲荷神社**　二本松市箕輪 1 丁目
2. **猫魔観音**　福島市西中央 5 丁目
3. **猫神社**　福島市笹谷字上横堀 74 番地、高橋家、現存しない
4. **猫神の祠**　伊達市梁川町大関字鹿子 80 番地、渡辺家、現存しない
5. **八雲神社**　伊達市霊山町掛田字猫塚・霊山町下小国字力持
6. **猫稲荷神社**　伊達郡川俣町西福沢字合国場

この中から、1・3・4・6について簡単に紹介する。二本松市箕輪の猫稲荷神社には、京都の伏見稲荷から授与された「稲荷大神神璽」が保存されている。この年代は、明治 7 年である。その後、猫稲荷神社に社名が変わったようである。2 月 2 日が祭日で、養蚕の神。猫の姿が入ったお札が氏子へ授与され、それには、「桐ノ木内鎮座　奉祭祀猫稲荷御神像」という文言が入り、版木も現存している。現在は、行方不明になった飼い猫が見つかるように祈願に来る人もいて、紙に猫の姿を描いて貼り付けている。

福島市笹谷の猫神社は、伊達家一門筆頭の石川家の伝

承がある。社殿の老朽化で 60 ～ 70 年位前に解体され、何枚か奉納されていた猫絵馬と一緒に廃棄された。現在は、社殿跡地に石祠と招き猫が置かれている。利益等については不明。

伊達市梁川町の猫神の祠は、飼い猫が行方不明になった際、その猫がいつも使っている器を祠の前に伏せて拝むと、いつのまにか猫が戻って来るという。赤滝石製の石祠であったが、損壊したので脇にある稲荷の祠に合祀された。

川俣町の猫稲荷神社は、養蚕守護や鼠除けにご利益があるということで、特に現在の福島市と二本松市の養蚕に携わる人々から信仰された。猫が描かれた絵馬を 1 枚借り、1 枚足して返すという、いわゆる「倍返し」が行われ、社殿内に多くの猫絵馬が積み上げられた。両面に猫の絵が描かれた絵馬もみられる。656 枚の絵馬があり、ほとんどに猫が描かれている。中には両面ともに猫や、「猫」という漢字を書いたものも少数ある。彩色も鮮やかに残っている。この数量と内容は、全国的に見てもほかに類例が無い。課題になっているのは、社殿が経年劣化と地震被害により、大きく右に傾いていることと、猫絵馬の保存である。福島県立美術館において「みんな大好き！福島ねこづくし」展（令和 4 年 7 月 23 日～ 8 月 21 日）が開催され、猫稲荷神社の猫絵馬が 347 枚展示される。多くの方に素晴らしい猫絵馬をご覧いただき、その絵馬が持っている先人の願いや、文化財としての貴重性について、少しでも関心を持っていただきたい。（会員　石黒伸一朗）

二本松市の猫稲荷神社の祭日

福島市笹谷字上横堀の猫神社跡

Column コラム　現代によみがえる南郷刺し子の文化

只見町や旧南郷村などの伊南川流域には、かつて刺し子の仕事着が伝えられ、特に旧南郷村一帯では堰普請や上棟式などに新しい木綿の刺し子半纏を晴れ着として着る習慣があった（「南郷刺し子」）。その製作は明治初期頃に途絶えたといわれるが、失われつつあった刺し子づくりの文化の継承を目指して平成 22 年に「南郷刺し子会」が結成され、県内外の会員により多くの刺し子半纏が製作されてきた。

今春、その活動を広く知ってもらうことを目的に、筆者の勤務する福島県立博物館では同会の作品を披露する展覧会「よみがえる南郷刺し子の世界」を開催した。また 6 月には地元南郷のひめさゆり祭りに合わせて、旧斎藤家住宅にて同会主催による展覧会「南郷刺し子絆纏」が開催された。こうした活動が話題を呼び、地域でかつて作られた古い刺し子袢纏が 2 点発見されるなど、新たな資料の発見にも結びついている。

近年、青木木綿や只見地方のユッコギなど、会津では地域に根づく布や衣類の文化に新たな光が当たりつつあり、またそれらは地元の方々を中心とした活動として展開している。今後の動きにも注目したい。（事務局　内山大介）

県立博物館の展示会場での南郷刺し子会の皆さん

新たに発見された古い南郷刺し子袢纏
（斎藤家住宅での展示のようす）

note から 竹島善一氏の撮った昭和 40 年～ 50 年代の奥会津

令和４年６月 18 日から７月 10 日にかけ、三島町の交流センター山びこにおいて『竹島善一写真展　蘇る風光～東北・会津～』（主催：奥会津書房）が開催された。竹島善一氏は昭和 10 年に東京で生まれ、先代からのうなぎ屋を継いだ。そして氏はその生業のかたわら、昭和40年代から令和に入るまで幾度となく奥会津を訪れ、人々の暮らしを撮り続けた。本人曰く「写真家」ではなく「記録者」として、回数にしておよそ 800 回、時間にして半世紀もの間、奥会津を自らのカメラでモノクロのフィルムに写し込んできた。

今回の写真展は奥会津の昭和 40 年～ 50 年代の暮らしを中心に構成されている。大きく引き伸ばされた写真には、民俗学徒の視点でいえば、今では「民具」として蔵や作業小屋、そして博物館等でしか見ることのなくなった生活の道具が当然のごとく日常の風景に溶け込み、使われている姿を目の当たりにすることができる。この時期は発動機付の農機具が普及しはじめた頃でもあり、新旧の道具が共に写し出されており、興味を惹かれた。

竹島善一展ギャラリートーク

展示された写真（昭和 57 年下郷町大松川）

また氏はカメラを向けにくい葬礼もフィルムに収めている。棺を担いだロクシャクとともに墓へとおもむく葬列、その棺を土に埋める人々の姿を撮影することは関心のあるなしではない。東京在住の氏がその場に居合わせた偶然もさることながら、氏の奥会津に生きる人々との距離、関係性を象徴するもののように感じられた。

氏が撮った写真には物語がある。写った道具が何故そこにあるのか、写った人は何故そこに立っていたのか……氏から１枚１枚の写真にまつわるエピソードを聞けば、現実感をともなった暮らしの風景がいっそう浮かび上がり大変な感動をおぼえた。

企画展は終わったが、今回の展示写真を中心とした氏の写真集が国書刊行会から発刊を予定しているという。拙文で氏の写真の魅力が伝わるのか心もとないが、機会があれば手に取ってご覧いただければ大変有難く存ずる。（会員　川合正裕）

つぶや記

▼コロナ禍が続きますが、先日３年ぶりに当学会の大会を開催することができました▼県外から講師を招いた講演会は行わず、参加者も例年に比べれば少なかったですが、顔を合わせて情報交換できる機会のありがたさを感じた１日でした▼コロナに加えて暑い日もしばらく続きそうです…▼各地ではお祭りも少しずつ再開し始めているようですが、ご見学・調査の際にはくれぐれも体調管理を万全にされてください▼見学記などのご投稿もお待ちしています（内）

福島県民俗学会通信誌『ふぉーらむ・F』第 15 号
2022（令和４）年８月 31 日発行
編集・発行　福島県民俗学会（会長 岩崎真幸）
福島県会津若松市城東町１-25　福島県立博物館内
事務局：内山大介・佐々木長生
通信誌編集担当：岩崎真幸・丹野香須美・内山大介